2022年度
学校推薦型選抜・社会人選抜
試験問題

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　用紙は試験問題１枚、解答用紙１枚の合計２枚です。

3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があります。**
※解答開始の合図の直後に必ず記入してください。
①　氏名欄
②　受験番号欄

5　**解答は、黒の鉛筆またはシャープペンシルで解答用紙に記入してください。問題用紙の余白部分は下書き等に使用しても構いません。**

6　試験時間は90分です。

7　試験終了後、問題冊子は回収しますので持ち帰らないでください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アフリカから久しぶりに日本に帰って、「手仕事」や「手づくり」ということに、異常な関心がはらわれているのに驚いた。それまでの二年半、私が、基礎的な生産技術の調査をしていた西アフリカ内陸の社会では、人々は労苦の多い手仕事に追われていて、できればもう少し、作業が機械化されればよいと切実に考えている。それは、つい四十年ばかり前までの、私たちの先祖の願いでもあったにちがいない。

だが、そうした願いが、いくつかの面でかなえられてみると、今度は、そういう方向への社会や技術の変化がもたらす、否定的な側面が浮かびあがってくるのであろう。機械化による規格品の量産、こまぎれの分業。作る者自身が、作られる物の全体を構想し、創意と肉体の修錬を生かしてみずからの手で完成し、生活の糧を得るというよろこびの喪失。それは、人間のかかわりあう範囲の拡大、生産・流通・消費機構の巨大化、国際化された技術の進歩と欲望の肥大のいたちごっこのうちに、次第に勢いを増しながら人類を押し流している。この流れに関しては、採集・狩猟の生活から、自然の人為的なコントロールと食料生産へと踏み出した新石器時代以降、程度の差こそあれ、基本的な志向において人類のすべてが共犯者であったようにみえる。

現実に存在する物質上の不平等がもたらす不幸、量産が可能にした豊かな物質生活と労働における人間の疎外との軋轢は、社会体制をこえた、工業化の不徹底な過渡期の現象であるといえるのだろうか？

〈中　略〉

肯定形ではない、疑問符のついたこの問いは、街の店頭に文字通り氾濫する商品を見て、「過剰だ、過剰だ」とつぶやかずにはいられない日本に帰って、まっさきに私の心によみがえったものであり、しばらく前まで、あのひからびた乾季のサバンナの、ビニールの空き袋ひとつでも子供が奪いあう社会に暮しているあいだ、池の底から水面の喧噪を見上げるような気持で、くりかえし自問していたものだ。

変化のはげしい日本に戻った当初の私が、うろたえさせられることの多かった中で、些事ながらいまも忘れないのは、年の瀬で雑踏する東京の街を歩いていて、食品売場で「杵つき餅」と大書したビラが目に入ったときの、怪訝さの混った驚きの気持だった。アフリカで、食物といえば臼と杵でつくのを見慣れていた私が、軽い興奮をおさえて、人ごみをわけて近寄ってみると、鉢巻をした若い男が「さあ杵つき餅だ、杵つき餅」とよばわっている。きくと、某地方で人が杵でつき、つきたてをその日のうちに東京へ運んでくるという。私も日本の餅は、手づきときけばとりわけなつかしく、幾切れか買って帰り、早速、東京風の雑煮に仕立てて食べた。

運が悪かったのかもしれない。私の食べたその餅は、粳の多い、大層あっさりとついた餅で、ねばるどころではなかった。蒸籠の湯気のこもった土間に臼をすえ、松薪でも割るようなはりのある杵の音と、こねとりの掛け声もろともつきあがる、私の少年時代にまだあった餅は、からみ餅にしても、のし餅にして雑煮につくっても、ねばりからしてちがったものだ。

いま東京の町で売っている「杵つき餅」にも、私がたまたま食べたものよりおいしい餅はあるのかもしれない。だが、期待のあとの失望から私が邪推せずにいられなかったのは、手づくりだからこそ手をぬいてあるのではないかということだった。事実、好奇心にかられた私が、近所の菓子屋の、機械づきであることをたしかめて買った切り餅を、同じ鰹節のだしと小松菜の雑煮で食べくらべてみると、機械が骨惜しみせずに働いてついた餅の方が丁寧につけていることは、歴然としていたからである。

だから「手づくり」などというものも、しょせん、商業主義によって簡単に堕落するのだといってしまうのは、だが、物事の局部的なとらえ方というものであろう。現代生活における手仕事の復権を標榜する工芸展では、私は同一の事象の、反対の側面をみせられる思いがしたからだ。

たしかに、そこに展示されているものは、見事な手づくりの逸品ばかりだった。決して手をぬいてなどいない。むしろ工夫されすぎ、手がかけられすぎている。あまり工夫が凝らされていて、実用にはどうかと思われるものも多く、そして何よりの欠陥は、どれもひどく値が高いことである。一昔前なら、太郎兵衛さんがどじょうをすくったような、何の変哲もない浅い竹のざるが、一万五千円などというのを見ると、これは一体どういう人が買って、何に使うのかと首をかしげたくなる。

手仕事によってしか人間が物をつくることがなかった時代には、大切なのは、実用品としてものが良く、値が安いということだった。偏屈な名匠でもなければ、効率よく沢山つくることもまた、値を安くするために必要だったはずである。しかし、こうした要請のいくつかは、機械化と、世界のさまざまな地域の交渉の緊密化によって、手仕事では到底及ばないところまで達成されてしまった。

工業化の進んだいまの日本では、物をつくるという元来単一のものだった行為は、疎外された労働による量産と、高度の技術をもつ少数の工芸家による、少数の富める風流人のための贅沢品の製作とに分裂してしまっている。しかも後者は、ありきたりの実用品の市場からは、前者によって完全にしめだされているために、工芸家ひとりひとりの個性やデザインの奇抜さ、技巧の特殊性を掲げざるを得ない。作品が規格に従って量産されない点でも、実用をはなれた美的価値に重点が置かれている点でも、現代の工芸家はかつての工芸師ではなく、近代的な意味での芸術家になりつつある。

この両極にはさまれて、近年さかんになってきているのが、疎外された労働とひきかえに手に入れた金銭と余暇で、自分自身や親しい者のために何かをつくる、趣味の手仕事だ。これは純粋に回復された手仕事のようでいて、その実、元来の「職」としての手仕事の社会・経済的な意味がすっぽり抜け落ちている。それだけではない。そこには、「雑器の美」といわれたもの、機能性と経済性が装飾性や象徴性と緊張を保つところに、たくまずして生み出される「かたち」の美しさ、無名の集合としての工人が、無名の集合としての使用者との長い交流の中から集合的な知恵によってつくりだした「用の美」は求むべくもない。第一その種の美は、機械が未発達で、実用品の量産がもっぱら手仕事で行なわれていた時代、いまの工業社会では過去のものとなった一時代の産物であったことを知るべきだ。ものをつくり、使う条件がまったく異なっていたかつての一時代に成立しえた工芸の美を、今日人工的に追い求めるのは、むなしい幻影を追うことでしかあるまい。

〈中　略〉

かくて、押し戻しようもない流れの中で、感傷的に夢想され求められる「手づくり」が露呈するのは、一方では「手づくり」という名目の悪しき商品化であり、他方では、かつての手仕事の社会的な意味が剝がれ落ちたあげくの骨董化なのである。

手仕事をめぐるこのような倒錯状況を生み出している責任は、すでに変ってしまっている現実にあると同時に、その現実を前にして人が抱かずにいられない幻想にもあるのであろう。「手仕事」も「伝統」と同じく、それが自覚され、価値づけられた瞬間から、こわばった、「ためにある」ものに姿を変えてしまう。ことは、かつての民芸運動のもたらしたものや、現代の「ふるさと」の祭りや芸能にもあきらかだ。

（『サバンナの博物誌』川田順造）

問一　本文を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二　本文を読んで、「手づくり」と「機械化」について、自分で考えたことを八〇〇字以内で述べなさい。